

『国牛十図』と『駿牛絵詞』にみる筑紫牛

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者名	松尾,雄二
発行元	養賢堂
巻/号	97巻5号
巻号補足	
掲載ページ	p. 423-429
発行年月	2022年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



『国牛十図』と『駿牛絵詞』にみる筑紫牛

松尾雄二*

〔キーワード〕： 壱岐、筑紫牛、国牛十図、駿牛絵詞

1. はじめに

壱岐島（長崎県壱岐市）は九州本島から北方の玄界灘に浮かぶ南北 17km 東西 14km の平坦な島で、朝鮮半島と九州本土の間に対馬と相前後してその中間に浮かぶ。陳寿（297 年）の『三国志』魏書東夷伝倭人の条には「一大國に至る。官を亦た卑狗と曰い副を卑奴母離と曰う。方三百里可りなり。三千許りの家有り。差田地有りて田を耕せども、猶食うに足らず。亦た南北に市糴す」との記述があり、『三国志』は壱岐島（一大國）の地形・位置関係をほぼ正確に記述している。また、文中に「市糴す」とあるように、朝鮮半島から対馬、壱岐（一大國）、九州へと結ぶルートは古代からの海外交通・交易の要衝であった。

ところで、寧直麿（1310 年）の『国牛十図』に記載される十牛のうち、その最初に筑紫牛が記載されている。その題名には「筑紫牛 以壹岐嶋牛称之（筑紫牛 壱岐島牛を以て之を称す）」と記載（図 1）され、筑紫牛は壱岐島の牛である。筑紫牛については時代が少し早い、寛元二（1244）年の『新撰和歌六帖』

888（『和歌集』）の後の番号は新編国歌大観番号をさす。以下同じ）の正三位（藤原）知家の「浪路分け京こ（みやこ）に来たるつくし牛草につけてやさかりみゆべき」とあり、筑紫牛は和歌に詠まれた「つくし牛」と考えられる。和歌によれば、壱岐から海路（浪路）波頭を乗り越えてはるばる都に来たことが理解され、正三位知家など京の貴族の人々にも筑紫牛であると認識されていたことがわかる。ちなみに、和歌中の「さかり」は草の盛りと、牛のさかり（発情）の 2 つの意味がある。この中で謎の多く残るのが筑紫牛と言われる壱岐島の牛である。なお、鎌倉時代前期頃に長崎県内にいた御厨牛については、古代より第二次世界大戦前の黒毛和種品種成立前までの平戸牛、五島牛、小値賀牛などをとりまとめて報告した（松尾 2020a, b）。今回も同じ手法を用いて、『国牛十図』と『駿牛絵詞』を中心に関係文献を利用し筑紫牛の解明を行った。

本稿中では、著者名の次に（ 年）書きで推定記述年を記載するとともに、文献名を『（文献名）』と表記し、文献内容を「 」内に原文（できるだけ引用文献の文字を使用）を示し、解説・注釈・単位（30.3cm/尺・3.75kg/貫匁）、文字、適宜、句読点を追記した。

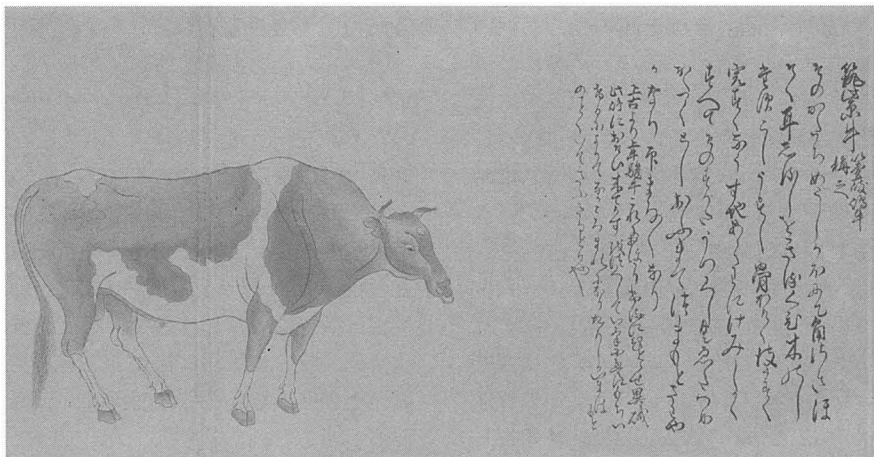


図 1 筑紫牛（寧直麿『国牛十図』）
国立国会図書館所蔵。

2. 『国牛十図』の筑紫牛

延慶三(1310)年の河東牧童こと寧直麿の『国牛十図』には筑紫牛、御厨牛、淡路牛、但馬牛、丹波牛、大和牛、河内牛、遠江牛、越前牛、越後牛の姿形などが文章や絵で記録されている。国立国会図書館所蔵の藤貞幹の書写した寧直麿の『国牛十図』は「集古圖」と題し、副題に「国牛十圖」として巻物になっている。巻物を開くと、最初に藤貞幹の序文として「国牛十圖叙文ノ首闕惜ヘシ、又牛圖十アルヘリシテ、今所存九ツ若一圖逸スルカ、他日全本ヲ得ルヲ俟 安永七年歳次戊戌五月 藤貞幹」とある。巻物の横の紙の継ぎ目に細長い朱印があり、その朱印には「左京藤原貞幹」と刻印されている。中国風三文字の署名の藤貞幹の「藤」は藤原であり、藤原貞幹が本名である。また、序文中の「一圖逸スルカ」とあり、最後の越後牛の絵はない。これからみれば、書写された安永七(1779)年には既に越後牛の図は失われていたと考えられる。堀保己一の『群書類従』の『国牛十図』はこの藤貞幹本(寧直麿の原本は未発見)を書写したものである。

(1) 筑紫牛の由来

壱岐島牛がなぜ「筑紫牛」という名前なのか謎が残る。筑紫牛の筑紫(つくし)には二つの意味がある。一には『古事記』などにみられる九州全体と、九州北東部(7世紀末に筑紫が筑前国と筑後国に分離)の二つの意味がある。平安時代に壱岐から牛を京に送ったのは筑紫の大宰府政庁(鎌倉時代は鎮西奉行)である。『国牛十図』では十図のうち九州内に存在する牛は筑紫牛と御厨牛である。同書には筑紫牛が最初に記述され、後述の『駿牛絵詞』でも筑紫牛14頭と最多の記載数がある。筑紫から送られる代表的な牛であるため、筑紫牛と呼ばれたと推測される。これを傍証するのが以下の説である。

ア 壱岐嶋牛という筑紫牛

大正六(1917)年5月の農商務省農務局の『和牛ニ關スル調査(以下、『和牛調査』と略す)』によれば、「壱岐牛」の「名稱ノ由來、壱岐ノ産牛ハ古來筑紫牛、有明牛若クハ牧ノ小牛トシテ世ニ知ラレ惟フニ本島産牛カ移出セラレテ肥筑ノ平野ニ育成セラレシニ因ルナラン」とある。本書に記載される筑紫牛や有明牛(有明は夜明け、明け方の一般名、地名としては多数あり。壱岐との関連性は不明)につ

いては、『和牛調査』中の「肥筑ノ平野」で育成されたため、その名前をもつと解釈されている。肥筑ノ平野がどこかは記載されていない。推測すれば、927年の『延喜式』の「諸国馬牛牧」に記載され、かつ壱岐島に近い地域に存在する牧は、肥前の柏島牛牧および筑前の能臣島牛牧が考えられる。そして、そのまま海路、京に渡ったと推測される。柏島牛牧は佐賀県唐津市神集島の牧とされ、壱岐島からみれば、九州本土に近い島の一つである。また、能臣島牛牧は福岡県福岡市能古島の牧とされ、日本から朝鮮半島への航路の重要な拠点であり、大宰府政庁(鎮西奉行)に近い点もその可能性を高めている。肥筑とあることから双方の牧である可能性がある。

イ 壱岐嶋牛と牧の小牛の関係

『和牛調査』中の「壱岐ノ産牛」の異名「牧ノ小牛」については、前述の文章に続けて、「藤原長清卿ノ夫木集ニ「雪の島牧の小牛のみとせまではなぬ程もたへかたのよや」名稱小鏡ニ「雪の島(壱岐の島)磯馴松なでしこ牧の小牧」トテ牛牧場ノ記事アリ」とある。これは「牧ノ小牛」の解説と思われる。最初の『夫木集』の和歌は1243年の『新撰和歌六帖』886の衣笠(藤原)家良の「雪の島牧の小牛の三年にて鼻刺すほともたへかたのよや」が引用元である。また、「名稱小鏡」の和歌は1678年の『名稱小鏡』に「雪嶋 壱岐 磯馴松なでしこ牧の小牛」とあり、「名稱小鏡」の和歌中の「小牧」は小牛の誤記と考えられる。この二つの和歌に共通しているのは「雪の島」と「牧の小牛」である。雪の島と壱岐島の関係を見る。現在、「行き」という言葉はイキとユキの両方が発音され、壱岐も同様に混同(万葉集に「由吉」表記)されていると考えられる。そのため、壱岐(イキ)は雪(ユキ)と連想され、壱岐島は雪の島と想起されている。そのため、雪のイメージは、江戸時代の歌川広重(1856年)の『六十余州名所図会』の壱岐の志作の雪化粧(雪景色)などの絵が有名である。壱岐では雪が降るが、実際の積雪は数少ない。これらを見ると、雪の島=壱岐島は掛詞「牧の小牛」に掛かり、雪の島(壱岐島)と牧の小牛(壱岐島牛)の関係は、当時の京の貴族が理解し連想され、深く結びついていたと考えられる。このように一連の和歌をみえてくると、牧の小牛はこれらの和歌に由来した壱岐産の筑紫牛である。

(2) 牧と牧の子牛の関係

牧ノ小牛の名称から、壱岐の牧で飼養されたことが想像される。しかし、『延喜式』の諸国馬牛牧の中に壱岐の牧の名前は見えない。『和牛調査』中の蕃殖の沿革には「往時ハ島内諸所ニ牧場アリ其ノ中鯨伏村本宮、沼津村小牧、渡良村牧ナトハ有名ナリ」とある。壱岐の鯨伏村本宮、沼津村小牧、渡良村牧などの牧は古代から続いていたと推測される。先述した地域を含め、壱岐の海岸近くにはシバ草地などの牧野が広がっている。同じく『和牛調査』には「草飼ト称シ草生地ニ牽キ出シ自由ニ採食セシム（中略）夏季草生地ニ繋牧スルコトアリ」とある。また、壱岐牛の飼養管理については、『和牛調査』中に「飼料ノ種類分量及調理法、藁（麦・稻）青草、乾草、甘藷、甘藷蔓、豆麥ノ稗皮、藁稗ハ七八分ニ切り稗類ヲ加ヘ熱湯ヲ注キテ攪拌シ米麥ノ糠ヲ調味シ一日三回給與シ其ノ日量一貫五百匁内外トス、青草期ニハ間食トシテ青草ヲ投與」するとある。このような牛の飼養法は昔（平安時代）に遡るかもしれない。

多くの壱岐島（雪の島）の和歌中に掛詞「牧ノ小牛」とあることから、牛が小柄（小牛）であったことを想起させる。同じく『和牛調査』の壱岐牛には「身幹ハ牝三尺八寸（115cm）、牡四尺一寸（124cm）乃至四尺三寸（130cm）ヲ平均トス、体量ハ牝八十貫匁（300kg）、牡百貫匁（375kg）位」とある。『和牛調査』の全国の「和牛（黒毛和種等の品種ではなく、当時の在来牛）」の牝身幹 112.1～115.1cm、体量 225～375kg、牡身幹 127.3～130.3cm、体量 375～563kg 程度で、現在の牛よりは小さいものの、当時の全国平均の普通の大きさである。それであれば「牧ノ小牛」の「小」は「子」とも解釈でき、牝成牛よりも子牛が船舶での運搬もしやすく、筑紫牛の子牛が壱岐から京まで運ばれたと考えられる。そのため、筑紫牛は和歌では「牧ノ小牛」と称されたと推測される。

（3）筑紫牛の原文内容と挿絵

『国牛十図』は本文と挿絵（図1）から構成されている。筑紫牛の原文は「そのかたちめうしかほにて、角さきほそく耳しるしをきる、くひ木のしたすこしうすく、骨ほそく皮うすく突すくなう、筋あらわに、けみしかく、すべてそのすかたうつくしく、えたつめかたく、としおふまで、つまもとさはやかなり、印まちまちなり」とある。筑紫牛の顔姿形は牝牛顔様で、その角の先は細く耳印を切ってある。

頸木（軀）の下は少し薄く骨は細く皮は薄く肉（肉）は少ない。その筋は頭わになり毛も短く、すべてその姿は美しく、足部の枝爪は硬く歳老うまで足の爪元は爽やかであり、焼印はいろいろであると記録している。これらの文章から、筑紫牛の絵（図1）は本文そのままに絵に表現されていると推測される。それを見ると、大きくて男性的な御厨牛とは対照的に女性的で優美な姿が描かれている。『和牛調査』には「性質極メテ温順伶俐ナリ」とある。筑紫牛の絵（図1）を見れば、筑紫牛の毛色は茶色と白の斑紋があり、額、肩から腹にかけて、肢端の一部も白斑になっており、ホルスタイン様の斑牛（まだら牛）と思われる。さらに、絵（図1）を見ると、筑紫牛の右耳に欠けたところがある。これが本文の「耳印を切る」意味であり、牛の耳たぶを切り、印として刻む耳刻と推測される。当然、耳刻であるならば、個体識別として利用したと考えられる。絵の中で明確に耳印を切ったものは筑紫牛のみである。筑紫牛の個体数が多く、同じ体毛色のウシが存在し、識別が困難で耳刻による個体識別が必要になったと推測される。なお、真野（1933）の『放牧牛馬の耳印』には隠岐島に伝わる牛馬の耳印を記録しており、知夫村の項でタブラに似ている。タブラは耳の下縁中央部を耳の縦線を直角に、即ち垂直に切り込むことである。ただし、タブラの名称などは壱岐のものと同じのものかは判断できない。また、鼻環（鼻刳）はすべて『国牛十図』の九牛の図に共通して描かれている。当時は縄状の鼻環（鼻輪）が装着しており、牛の鼻輪によってヒトに制御されていたことがわかる。当時の鼻環の材質は不明であるが、安土桃山時代のイエズス会宣教師（1603-1604年）の『日葡辞書』によれば「Fanaguri【鼻刳】鼻刳または Fanazuri（鼻蔓）ともいい、むしろの方がまさる。木か木蔦か、あるいは柳の枝かで作った一種の輪であって、牛の鼻孔に穴をあけて、そこにさしとおすもの」とあり、絵にある縄状の鼻環（鼻輪）は柳の枝、木、木の蔦などで振って縄状にして輪に加工したものと考えられる。また、1310年の『夫木抄』12956の衣笠家良の歌に「雪の島牧の小牛の三年にて鼻刺すほともたへかたのよや」とあるように、牛は数え三年で鼻刺し（鼻刳）を行い、鼻環を装着していたことがわかる。『和牛調査』によれば、「生後四ヶ年ニシテ蕃殖用ニ供シ」とあり、当時の三年の牛はまだ

子牛と考えられる。

松尾 (2020a, b) によれば、御厨牛は「維新以前ハ専ラ同種蕃殖ニ依リシカ『和牛調査』」とある。それまでの文献中に組織的な改良がなされたという記述がない。そのために、以下の文章比較を行った。『和牛調査』の外貌に「筋腱能ク緊縮シ蹄ハ小ナレトモ其ノ質堅牢ニシテ頭頸四肢輕美ナリ」とされ、「筋腱能ク緊縮シ」のところは『国牛十図』中の「骨ほそく・筋あらわに」に相当し、「蹄ハ小ナレトモ其ノ質堅牢ニシテ」のところは『国牛十図』中の「えたつめかたく」に相当し、「持久力ニ富ミ (中略) 行歩輕快ニシテ険坂堯角ノ地ヲ巧ミニ歩行ス」のところは『国牛十図』中の「としおふまで、つまもとさはやかなり」に相当すると思われる。さらに、「頭頸四肢輕美ナリ」のところは『国牛十図』中の「そのかたちめうしかほにて・そのすかたうつくしく」と平安・鎌倉時代の筑紫牛が大正時代の壱岐牛までほぼ同一の表現である。従って、御厨牛同様に、『和牛調査』の壱岐牛は『国牛十図』の筑紫牛の後裔と推測される。

(4) 筑紫牛における元寇の影響

『国牛十図』の本文中の小さな注記 (後年の追記か) は「上古より上牛駿牛これにおほかりけるに、ひととせ異賊此嶋にをそひ来て、かずをつくして、いけにへもちひけるによりて、なかごろまれになりたりしが、いまはもとのごとく、いできにたりとかや」とある。これを解説すれば、上古の時代より筑紫牛には上牛や駿牛が多かったとされる。ある時あるいは一年前、異賊がこの壱岐島に来て襲い、筑紫牛の数が尽きるほど奪い生贄としたため、中頃まで筑紫牛の数は稀になったという。今はもとのように京に筑紫牛が多く来ていると記述している。壱岐を襲った異賊とは刀伊の入寇 (1019年) ではなく、文永・弘安の元寇 (1274・1281年) と考えられる。元寇を記録した『八幡愚童訓』には、文永「十一 (1274) 年九月比異賊四百五十艘大船三萬人乗寄來。對馬壹岐二嶋打落」とある。壱岐島に元の船 450 隻で大軍 3 万人が押し寄せ、壱岐島を陥落させたとされる。壱岐で「いけにへ」とされた牛馬がいなくなった理由は、同じく『八幡愚童訓』中の「自元牛馬美物トスルナレハ被射煞以馬食トセリ」とある。彼らは牛馬を美物 (おいしいもの) の食料とすることから、元軍は戦場で射殺された馬を食うと記述している。そ

のため、壱岐を侵略した元軍兵士はその地に飼養されていた牛を奪い去り肉として食べたため、筑紫牛は急激にその数を減らしたと思われる。『国牛十図』が書かれた 1310 年頃は元寇から 29~36 年の時間が経ち、京でも筑紫牛の数が戻りつつあったとされる。なお、1330 年の『駿牛絵詞』の「文字鳥」の説明にも「異賊がために筑紫牛まれなりし程、この牛逸物にて出来侍しは、めずらしき事にてはべりき」とあり、この中の異賊は、『国牛十図』と同じく元寇のことである。そのため、筑紫牛が稀になり、文字鳥のような逸物ができたのは珍しいといっている。この記述をみれば、筑紫牛は全滅したわけではなく、かなりの筑紫牛の子牛などが残存した可能性が考えられる。なぜなら、元寇が夏から秋 (旧暦九月) であったことから、軍船には十分な食料 (生牛肉) は保存できなかったと考えられ、戦時中に牛を捕らえ、数日間で何千頭もの牛を壱岐島で殺し塩肉として加工し食料としたとは思えない。また、小さな子牛は手間ばかりかかり、肉が少ないので食べなかったと推測される。そのため、残存した子牛が育ち、壱岐島の牛の数を回復させた可能性が考えられる。その当時、壱岐島牛の飼養頭数はどれくらいであったのであろうか。藩政時代の享保五 (1720) 年に 5,070 頭 (山口 (1938) より抜粋)、明治十五 (1882) 年は 7,457 頭、明治三十三 (1900) 年は 10,477 頭、大正九 (1920) 年は 8,514 頭、昭和十 (1935) 年は 7,733 頭 (明治以降は『長崎県統計書』による)、現在の壱岐市 (壱岐島) の肉用牛飼養農家は 656 戸で、10,707 頭を飼養 (R2.4.1 現在、長崎県畜産課調べ) しており、現在も肉用牛生産の盛んなところである。各時代を通じて元寇当時も壱岐島に数千頭前後が飼養されていた可能性がある。

(6) 焼印と筑紫牛・遠江牛の所有者

松尾 (2020a, b) および網野 (1992) によれば、御厨牛は靱絵 (巴) 紋で西園寺家所有であった。筑紫牛の本文に「印まちまちなり」とあり、いろいろな焼印は筑紫牛の所有者が西園寺家系統の諸家多数であったことを示している。また、網野 (1992) によれば、御厨別当を西園寺家が所掌し、御厨牛のみでなく、筑紫牛、淡路牛、遠江牛、河内牛、但馬牛、丹波牛、大和牛、越前牛、出雲牛なども西園寺家が関与した可能性を示唆している。ところで、『国牛十図』の「遠江牛 (相良牛)」の項で筑紫牛に関

連した記事がある。それには「人おほく誤りてつくし牛といふ、印いほりのなかにものあり、又すはまをもさすにや。故今出川入道太政大臣家よりつくし牛のちちははを、このまきにうつされてより、このすがたなるよし、有某説」とある。遠江牛（別名、相良牛）は筑紫牛に似ていて、人々皆が誤って筑紫牛というたとされる。故今出川入道太政大臣（西園寺公経あるいは実氏）家より筑紫牛の父牛、母牛を遠江の相良牧（静岡県牧之原市相良付近）に入牧させてから、筑紫牛（ちくし牛）と間違われるようになったという説があると紹介している。本文中の「印いほり」の焼印は庵紋、「すはま」は洲浜紋と考えられ、遠江牛の所有者は庵紋あるいは洲浜紋を持つ遠江と関連した西園寺家一門と考えられる。

3. 『駿牛絵詞』の筑紫牛

(1) 『駿牛絵詞』の成立時期と花山院家の関与

この『駿牛絵詞』は1330年頃に元太政大臣大炊御門藤原頼実（1155-1225）の孫（名前不詳）が書いたものと紹介（松尾 2010a, b）した。また、文中に「左中将実忠朝臣筆」とあり、藤原実忠が左中将であった時は玄応元（1319）年頃であるから、『駿牛絵詞』はその頃以降に書かれたものと考えられ、その成立年は『国牛十図』より少し遅い。また、『駿牛絵詞』には最後の記述に「花山院家秘抄」とあり、同じ藤原北家で大炊御門家に関連のある人物が記録し、花山院家に関連した人物が保存に関与している。なお、『群書類従』所蔵の『駿牛絵詞』の文章の最後に元禄十三（1700）年正月の書き込みがあり、花山院家所蔵の『駿牛絵詞』をこの時に塙保己一らが筆写したと考えられる。一方、京都大学附属図書館の『駿牛絵詞』には宝暦壬（1752）年の日付があり、難波前垂相卿（飛鳥井（花山院）前大納言）の署名があり、この『駿牛絵詞』についても花山院家の関与が示唆される。

(2) 牛の名前のはじまり

『駿牛絵詞』には牛の名前（呼名）のはじまりについて記している。そこには「牛に様々な名をつけらるる事、いずれの頃よりいできたるぞや。答云。牛馬異名、その起こり遙かに遠し（中略）在中将殿とてやさしき人のためしに申し伝えたるは、平城天皇の御子なにがしの親王とかやの御息、皇孫とてもてなし申されて、仁明天皇の御宇承和十四年正月蔵

人頭になり給ひて、おなじ二月春日まつりの使いにたたれしに、公家よりびりやうの御車に角白と申御牛をかけて下されけり。さればかりの角白や、この国の牛の名のはじめにてはべらむ」とある。この文章の中に仁明天皇の時、承和十四（847）年正月に牛車を牽く牛に「角白」という名前をつけたのが国内における牛の名前のはじまりという。ちなみに、仙洞とは上皇（法皇）の御所の意味であり、上皇自身を意味する場合もある。この牛は牛車には牡牛（ことひ）が主に供されたことから、牡牛と推定される。なお、「角白」が音読みなのか、訓読みなのかかわからないが、平安・鎌倉時代の貴族の名前は訓読み（音読みは仏僧にある）が多い。牛の名前の多く（後述）が漢字で表記されている。現在、全国牛登録協会では、オス牛の名前は漢字表記である。

(3) 筑紫牛の名前など

『和牛調査』によれば、壱岐牛の「松浦壱岐守入部日誌」一節「古昔筑紫牛と称するは総て壱岐國の牛なりされは後白河院の御寵愛されたる獺丸と云ふ牛後鳥羽院の香象と云ふ牛など皆壱岐の産なり此事駿牛、絵詞又国牛十図と云ふ書に見えたり」等ハ古史ニ見ヘタル壱岐牛ノ記録ナリ」とある。『駿牛絵詞』における筑紫牛の名前は、獺丸、香象、小額、荒鳥、継木、松谷樹、牛玉、下帷、小角、文字鳥、諸鬘、頸上、武蔵野、八幡未濃の14頭であり、『国牛十図』の十牛の中では一番多い。その牛の紹介記事には、牛の名前、牛の産地（〇〇牛）、牛飼童の名前、現所有者（所属）、逸話の順（一部項目は書かれないことがある）となっている。筑紫牛のそれぞれの牛を紹介する。

獺丸は、「獺丸 筑紫牛 後白河院牛 鳥羽院へ御幸に羅城門の前よりかけらるゝに彼御所の門まで歩足なくをどり侍ける駿牛なり」とある。獺丸は後白河院の牛で、鳥羽院へ御幸されるときに平安京の羅城門の前より駆け、鳥羽院の御所の門まで直線距離で3km程を歩足なく踊り駆けぬけた駿牛と記録されている。これは『駿牛絵詞』主題の駿牛の具体例である。『和牛調査』の「本牛ノ特有ト認ムヘキ事項」として「持久力ニ富ミ粗飼ニ堪ヘ行歩輕快ニシテ陰坂礪角ノ地ヲ巧ミニ歩行ス」と記載されており、その様子が後年にもみられる。「小額 筑紫牛」は「御室御牛」とあり、宇多法皇あるいは仁和寺の牛であったと推測される。牛玉は「牛玉 筑紫牛 常盤井

入道相国仙洞に進せらる」とあり、常磐井入道とは西園寺実氏(1194~1269)のことである。西園寺実氏から仙洞御所へ進貢されている。小角は、「小角筑紫牛 若宮別當實清法印牛 仙洞に進、容儀ことにすぐれたり、ちいさき角のおひめぐりて、目の志りにさへ侍し程に、度々さきをきられしなり」とある。この牛は容儀に優れ、小角の名前は小さな角であるため名づけられたとされる。その小さな角が蔽い曲がって顔の目尻に突き刺さるため、その度に角の先端を切って除角したとの記載がある。文字鳥は、「文字鳥 筑紫牛 一條大納言公勝卿牛、仙洞に召さる。異賊がために筑紫牛まれなりし程、この牛逸物にて出来侍しは、めずらしき事にてはべりき」とある。一條大納言公勝卿は藤原北家閑院流(西園寺庶流)とされ、この牛も西園寺家の関連牛である。異賊は前述したとおりである。諸鬘は、「諸鬘 筑紫牛 任寛法印牛、仙洞へ召さる。此牛、前のえだ張りて長細く、すべてなりおもふやふならず、目の前に獅子の眉のごとくなる突あり。腹あしくてをどりを好む」とある。「前のえだ」が張って長細いとされている。一部意味不詳。目の前に獅子の眉状の肉がある。腹が悪く踊りを好むと記されている。武蔵野は「武蔵野 筑紫牛 弥鷹丸 実淵僧正牛、女院へ召さる。をどりてとどまらぬ駿牛なり。うす色むさし野とて一双に申侍き」とある。弥鷹丸は牛飼童の名であり、実淵僧正牛とあるように、牛飼童は貴族のみではなく、寺院にも所属していた可能性がある。任寛法印牛同様に実淵僧正の寺院から女院へ召進されたようである。「武蔵野」という筑紫牛と「うす色むさし野」は一双だという。判然としないが、一双という点とひらがな混じりの名前から「うす色むさし野」は牝牛かもしれない。八幡末濃は、「八幡末濃 筑紫牛 松一丸 尚清法印仙洞に進。毛色めづらしう、勢大に心ある逸物なり」とある。「八幡末濃」は牛飼童の松一丸が操り、尚清法印から仙洞へ召進されたようである。「毛色めづらしう」は具体的にどのようなものか文章からは判断がつかない。このように、多くの牛が名前を持ち牛飼童に管理され、牛車の牽き牛であったことがわかる。

なお、香象(後鳥羽院御牛)、荒鳥、繼木、松谷樹、下帷および頸上は「筑紫牛」の記載はあるが、逸話等の記載はない。『駿牛絵詞』に説話はないが、名前が記録されていることから、これらの牛も駿牛

であったことがわかる。また、獏丸、香象、獅子丸(越前牛)および漆黒(産地不明)の後に「以上四頭勝光明院宝蔵本之由有其説」とあり、これらの資料は勝光明院にある書籍から転写記録されていると推測される。鳥羽上皇は保延二(1236)年に鳥羽殿北殿に勝光明院を建立していることから、勝光明院宝蔵本である獏丸、香象などの関係文書は上皇らの所有本であると考えられる。新大納言伊良禮子(出雲牛)、傳法院寶螺丸(越前牛)、荒鳥および懸牽(越前牛)の後ろに「已上五頭、左中将実忠朝臣筆」とあり、筆という言葉が出てくる。『駿牛絵詞』の文中に「少々写とどめたる」とあり、左中将実忠らが牛の姿や逸話を絵や文字として記録したものと思われる。繼木、山口(但馬牛)、玉箒(越前牛)および松谷樹の後に「以上四頭仙洞筆」とあり、仙洞御所で記録されたものであることがわかる。

(4)『駿牛絵詞』の絵

前述した『国牛十図』には記述された文章とそれを具体的に描写した牛の「絵」が描かれ、重層的な説明が行われていた。『駿牛絵詞』中に「かるらかに出て立たる者よりみて、さまざまの事をもきくかなとおもふ程に」とあり、改行して「繪」とあり、さらに改行して「裏頭者問云 されは」と続く。このように「繪」の文字を挿入した場所・位置には疑問が残るが、繪(挿絵)の存在がうかがわれる。現在は伝わっていないが、当初は絵が描かれて書物のこの場所に付録していたと思われる。その理由は以下のとおりである。

この『駿牛絵詞』には「後白河院獏丸、後鳥羽院師子丸、香象、漆黒など、その影をうつされて、鳥羽院の宝蔵に納められ侍とぞ、うけ給はる。後嵯峨院の御代よりの牛、洛中に名あるほどの牛、いくらか見をよび侍らむ。過ぎぬるかたは次第に忘れはれども、思ひ出すに従ひて語り申べし。又ことに名を得たる牛どもは所々に影に書き留めたる事おほくはべり。なにの要なき事にて侍れども、小童部より深く思ひそめにしほどに、上臈の御あたりに見をよびはべりしを所望して、とりをきたるが侍し。求めいでて見せたまつらむとて、後日にをくりたびたりしを少々写し留めたる。かくなん」とある。影とは人や物の姿や形の影で、影は絵画に写された影像の意味で使用されている。獏丸、師子(獅子)丸、香象、漆黒などは絵画に描かれ、鳥羽院の宝蔵

に納められたとされる。これは仙洞御所の勝光明院宝蔵本と同じものかもしれない。先に述べた『駿牛絵詞』の文中に「繪」とあるものは、鳥羽院の宝蔵などにあった書物を借りて、その内容として書写したものと考えられる。当初は『駿牛絵詞』の中に絵が描かれていたが、その後、牛の「繪」のみを切り取って譲渡などで失われたと考えられる。なお、『駿牛図（断簡）』と呼ばれる数点の牛の絵が伝えられているが、本文と絵のイメージが合致せず、『駿牛絵詞』の「繪」の一部とは断定できない。

4. あとがき

筑紫牛（壱岐島牛）について、『国牛十図』および『駿牛絵詞』を調査したが、その姿や性質は『和牛調査』までほとんど変わっていなかった。貴族の力が弱まると、牛車は使用されなくなり、筑紫牛は牛車の牽き牛の役割を終えている。大正時代の『和牛調査』によれば、壱岐牛の用途は「農耕若クハ運搬用ニ供用ス一日ノ功程牝ハ水田一反五畝歩牝ハ同二反五畝歩トス」とあり、鎌倉時代以降は壱岐島内で農耕用あるいは運搬用に使用されていたと推測される。江戸時代までの筑紫牛（筑紫牛）の島外交流は資料が少なく不明である。『和牛調査』によれば、壱岐牛は「全島及佐賀、福岡、中國地方ニ分布ス」とあり、島外にも広まり、その得意先として「福岡縣ヲ主トシテ佐賀縣及本縣ノ一部トス、近時中國地方へ移出セラルハコトアリ」と記録しており、分布域を証明している。

牛に関する古代から中世にかけての文献的な資料は少ない。例えば、古事記、日本書紀、万葉集などに部分的に「牛」の字がみえているが、断片的である。ここで述べた『国牛十図』や『駿牛絵詞』は

平安時代から鎌倉時代にかけての牛の情報を大量に把握できる貴重な資料である。この両者は写本として多く残っており、中世の牛情報について今後研究すべきと考える。

引用文献

- 1) 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝、和田清・石原道博編訳、岩波書店。
- 2) 埴保己一、群書類従（駿牛絵詞・国牛十図）、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2535862>（国立国会図書館デジタルライブラリーのものは、以下、info 以下を表示する）
- 3) 新編国歌大観第二巻私撰集編（歌集）、角川書店、p381、758、東京。
- 4) 国牛十図、[info:ndljp/pid/2543102](https://info.ndljp/pid/2543102)、
- 5) 駿牛絵詞、<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00006511>（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ）
- 6) 農商務省農務局、和牛ニ関スル調査、[info:ndljp/pid/942456](https://info.ndljp/pid/942456)
- 7) 延喜式（改訂増補国史大系）、吉川弘文館。
- 8) 八幡愚童訓、[info:ndljp/pid/2559065](https://info.ndljp/pid/2559065)
- 9) 邦訳日葡辞書、1980、土井忠生・森田武・長南実編訳、岩波書店。
- 10) 名称小鏡、https://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko31/bunko31_a1962/bunko31_a1962.html（早稲田大学図書館古典籍総合データベース）
- 11) 網野善彦、1992、西園寺家とその所領、国史學、147、国史学会、東京、1-28。
- 12) 丹生谷哲一、2005、身分・差別と中世社会、塙書房、東京、233-271。
- 13) 歌川広重、六十余州名所図会、壱岐志作、[info:ndljp/pid/1308370](https://info.ndljp/pid/1308370)
- 14) 真野恒雄、放牧牛馬の耳印（1933）。「島（上）」所蔵、名著出版、1979、61-65。
- 15) 山口麻太郎、1938、壱岐産牛史、社会経済史学、7（11）、1255-1291。
- 16) 松尾雄二、2013、文献にみる長崎を中心とした古代からの牧について、畜産の研究、67（11）、養賢堂、東京。
- 17) 松尾雄二、2020a、「国牛十図」などにみる御厨牛（1）、畜産の研究、74（11）、養賢堂、東京。
- 18) 松尾雄二、2020b、「国牛十図」などにみる御厨牛（2）、畜産の研究、74（12）、養賢堂、東京。